(別紙2)

審査結果の要旨

氏名　大野　　威

本論文は、日本の自動車工業に始まり世界に波及して、国際的な論争の対象となったリーン生産方式（トヨタ生産方式）について、その正確な実態を把握し、それが肯定派のいうように労働者の自主性を尊重したものなのか、それとも批判派のいうように、労働者の自発性を尊重するように装いながら、じつは労働者をより徹底して効率的に働かせるものなのかについて、これまでの諸論を整理しつつ、それらを自らの参与観察に基づいて吟味して検討したものである。題目は、この生産方式においては、職場における労働者への労働に向けての「強制」が、一見そうではないかのように構造的に行われ、結果的に労働者が自発的に働いているかのように「同意」が調達されていることを意味している。

全体は序章、本論５章、終章、および補論からなる。著者はまず、序章でこの世界的に波及した生産方式の実態を明らかにすることの意義を説いたのち、第１章で、提唱者の議論などを忠実にフォローしながら、「JIT」（ジャストインタイム）と「自働化」とを２本柱とするこの生産方式が、「徹底したムダの排除」を基本思想とし、物的ムダと人的ムダ双方の排除においてそれを実現する仕組みであることを明らかにする。そして第２章では、この生産方式をめぐってこれまで展開されてきた論争を整理し、ジョブ・ローテーション、ローテーション、多能工化、QC（品質管理）や提案制度による改善活動、チーム制などを特徴とするこの方式につて、肯定派が、労働者の自律性の増大、助け合いの促進、非権威主義的な管理構造などを評価してきたのにたいして、批判派は、それらが結局は高い労度密度と厳格な労働管理に帰着している点を批判してきたことを指摘している。

続いて第３章で、著者は、テーラーシステムをめぐる労働過程論争の展開にまで遡及し、従来の本質論的労働者主体把握を越えたブラウォイ、ナイツ、クレッグなどの説を援用しながら、フーコー的な「主体化」論を具体化する形でリーン生産方式を分析することがもっとも適切であることを示唆する。そのうえで第４章と第５章では、著者が自ら雇用されて働き、参与観察を行った２つの自動車工場での体験を詳細に分析し、労働とは本来こういうものであるというような本質主義に立たず、現場での労働過程に自らの身体を投じてこの生産方式の現実の作動を謙虚に見るかぎり、リーン生産方式は、それを組み込んだ工場の構造をつうじて労働者を徹底して無駄なく労働するよう「強制」しながら、それをそうは感じさせないようなやり方で労働者の「同意」を取りつける、巧妙なシステムであることを明らかにしている。これらをふまえて終章では、そういう角度から「肯定派の虚構」が批判され、補論では、自らの実施した参与観察を研究史の文脈に位置づけるべく、マリノフスキーやシカゴ学派から労働研究分野に波及した参与観察の歴史が整理されている。

このように、この論文の最大の特徴は、労働・産業社会学の分野で国際的な論争の対象となってきたリーン生産方式について、その仕組みを提唱者などの主張に即してできるだけ客観的に把握したうえで、それをめぐる論争を丁寧に整理しつつ自らの視点と理論を明確にし、それにたいして最終的には自らの参与観察の冷静かつ詳細な分析をとおして裏付けを与えている点にある。この点で本論は、リーン生産方式をめぐるこれまでの論争に１つの決着をつける画期的なものといえる。第３章でテイラー・システムにまで戻って議論をやり直す部分について、そこまでの必要があるかどうかなどの指摘もあったが、それらはいずれも本論の高い価値を傷つけるものではまったくないといってよい。

それゆえ、審査委員会は、本論文が博士（社会学）の学位を授与するに値すると判定する。